

灰谷健次郎



わたしの

出会った

子どもたち

新潮文庫

98463

I313.65  
J463

わたしの<sup>であ</sup>出会<sup>こ</sup>った子どもたち

新潮文庫

は - 8 - 1



発行所

発行者

著者

昭和五十九年二月二十五日 発行  
昭和六十一年一月三十日 九刷

株式会社 新潮社

佐藤亮一

灰谷健次郎

郵便番号 一六二  
東京都新宿区矢来町七一  
電話 業務部(〇三)二六六一五一一  
編集部(〇三)二六六一五四四〇  
振替 東京四一八〇八番  
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付  
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

⊗ 印刷・大日本印刷株式会社 製本・憲専堂製本株式会社  
© Kenjiro Haitani 1984 Printed in Japan

ISBN4-10-133101-4 C0193

新潮文庫

わたしの出会った子どもたち

灰谷健次郎著

3058



# 目 次

『ぼくは悪いことをした』というぼくの聖書……………	九
「きりん」の若い战士们……………	二四
二つの盗み……………	三六
別離の向こうから……………	五三
骨くんの話……………	七〇
優しさと反抗と……………	八七
希望への道……………	一〇三
沖縄の空……………	一二三
肝 <small>ちむ</small> 苦 <small>ぐ</small> りさ……………	一三八

優しさの源流	一四
小さな巨人	一七
『たんぽぽ』の詩人	一七
学ぶということ	一八
教えるということ	二〇
変わるということ	二六
生きる	三九

解説 上野 瞭





わたしの出会った子どもたち



## 『ぼくは悪いことをした』というぼくの聖書

タツちゃんというおかまがいた。

いつも濃い化粧をしていたので、タツちゃんが何歳くらいなのかよくわからなかった。おかまは年より老けて見えるというから、案外、若かったのかも知れない。

タツちゃんの口癖は

「人生くよくよしてたらあきまへんえー」

であった。妙な京都弁を使うので、ぼくがそのことをいったら

「即席、即席」

といっていた。女言葉をはやく身につける為には京都弁が手っ取り早いという意味だったのだろうか。

タツちゃんは突然、ぼくのまたぐらに手を突っ込んできて、ぼくが悲鳴をあげて飛びのく姿を見ておもしろがったりした。

そんなことをいったりしたりするわりに、からっと明るくて嫌味がなかった。おかまがどういうことをするのか、淫靡いんぴな想像をするほどぼくが成長していなかつたということもあるのかも知れない。

タツちゃんと同じ合ったのは、ぼくのどん底時代だ。家庭の事情で進学をあきらめ、いろいろな会社や工場の試験を受けたのだが、どれも受からなかつた。

一九四九年というと、第三次吉田内閣が成立した年で、東京の三田職業安定所で自由労働者が仕事よこせ闘争を組み、全都に波及させるといふ事件が起こるほどの空前の就職難の年であつたのだ。

失業対策事業の日当が二四五円に決定されて、ニコヨンという呼称がはじめて生まれた年でもあつた。

小学校中学校を通して、いつも列の先頭だつたぼくは背が低いというだけで書類選考ではねられてしまうのである。おおかたの中卒者が、それぞれ進学なり就職先が決まっているのに、ぼくだけがニコヨンのオッサンたちにまじつて、毎日、職業安定所に並ばねばならなかつた。

これはひどい屈辱だつた。

ぼくはぼくでなくてもいいんだという思いが、ぼくを卑屈にした。自立を踏みにじられた人間の絶望というものをいやというほど味わされた。

中学校では進学組と就職組に分けられ、ぼくは就職組に入れられていた。

ぼくが自転車のチェーンをポケットにしるばせ、けんかをしてあるくようになったのはそういうことも原因している。

職業安定所に並ぶということだけで傷ついたのでなく、それ以前に義務制の学校で差別を受けていたわけである。

神戸の職業安定所の前に長屋があった。

三時ごろになると、化粧した男たちがそこから銭湯にいった。

職業安定所に並んでいる労働者が、野卑な言葉を投げると、もう一つそれを上回る猥褻な言葉を投げ返した。

それがタツちゃんだった。

ぼくはそんなやりとりを、ぼんやり見ていた。そのときぼくはおかまの方がずっと人間らしいと思っっている少年だった。

タツちゃんとはそのとき、知り合ったのではない。タツちゃんと知り合ったのはそれから少し後である。

職業安定所から紹介される仕事にろくな仕事はなかった。

風俗営業の類が多かった。紹介者は仕事の選り好みをしないうようにといった。そしてひとりの男をぼくに紹介した。

「商人になる気はないか。きみがその気なら面倒を見てあげてもいい」

ぼくは求職カードに定時制高校に通いたいということを条件として書き込んであった。この男は食わせ者だった。

突き出し菓子の製造販売をやっていたのだが、その従業員のほとんどが年端の行かない未就学児童だった。賄いのオバサンは知恵遅れという徹底ぶりである。

少女たちは朝から晩まで、修行僧のようにすわって落花生の皮剥かわきをやらされていた。今のように器械でそれをやるのではない。湯につけて皮をやわらかくしてから一粒一粒手で剥くのである。一日、豆の皮を剥いている。どの子の手も白くふやけていた。

数人の少女のうち、いちばん年かさでぼくより一つ年上のヨリエさんだけが、昼から福原の店へ店番にいらしていた。

その店へ自転車を置いて、それから定時制高校に通っていたので、ヨリエさんとはふたりつきりになる機会があった。

ヨリエさんはヤクザを徹底的にきらっていた。

「あいつがうちのおかあさんにオソソしたさかいにうちが生まれてしもたんや」  
そういつてぼくの手をにぎり、それから

「ねえ」

と甘えたような声を出した。

ぼくが女性を自覚した最初の衝撃的な事件だった。今から考えるとヨリエさんはそのとき、十六歳である。「ねえ」とはどういう意味だったのだろうか。

オソソなどという言葉は下町育ちのぼくでさえ、恥ずかしくて人前では口に出せない言葉なのである。ヨリエさんはよほど、あばずれだったのだろうか。

学校にいらすとすぼくに、店の菓子パンをそつとポケットに突っ込んでくれたヨリエさんは、ぼくにとって美しくて優しい人だった。

この店は、短期間でやめてしまうことになった。

知恵遅れのオバサンと屋根裏で寝かされることや、一日十円というひどい副食代の食事は苦にならなかつたが、いやなことはいろいろあつた。とりわけ記憶に残っていることは、朝の光景だった。

屋根裏から下へ降りるとき、夫婦の寝室が見える。真つすぐ前を向いて降りてしまえばいいのだろうが、思春期の少年にそれは無理というものである。

昼間、この男の妻君は狐のような尖<sup>とが</sup>つた顔つきで、ヒステリックなものの言い方をした。男にからみついて寝ていると、ひどく猥褻なものを感じた。

ふとんの中である動きがあるときなど、ぼくは息も吐けなかつた。

階段を降りるとき、わざとどんだん足踏みをして降りるのに、その妻君はそれを無視した。ぼくは屈辱を感じ、みじめな気持ちでいっぱいだった。

用事をいいつけられ、行き先がわからなくて帰ってきたときなど、その妻君はひどい言葉でぼくをののしった。なにか尋常でないものをぼくに感じさせ、それが、つい朝の光景と結びついてしまうのだった。

ぼくは店を飛び出した。夜だった。

教科書に収録されているぼくの作品に、『ろくべえまってるよ』（絵・長新太、文研出版刊）というのがある。穴に落ちたろくべえという犬を救<sup>すけ</sup>け出すまでのごく簡単な話だ。

この絵本のあとがきを、ぼくは次のように書いている。

「ぼくはむかし、こじきのオッサンに、たすけてもらったことがあります。十五さいのとき、なんきんまめやをおいだされ、ねるところも、たべるものもなくてないていました。こじきのオッサンは、ぼくにムシロをかしてくれました。あたたかいサトウゆを、つくってくれました。うちにかえるでんしゃちゃんまでくれました。そんなことがあるので、ぼくにはろくべえのうれしいきもちがよくわかります。ろくべえよかったな」

その頃、三宮駅の地下は浮浪者のたまり場だった。その店というのは、今の神戸新聞会館の裏側、国際マーケットの中にあった。

店を飛び出して、三宮駅の地下をうろろろしているとき、ひとりの浮浪者が声をかけてくれたのであった。

二、三人寄ってきて、あれやこれや面倒をみてくれたのだが、そのときはありがたいと思



う気持ちより気味が悪いと思う気持ちの方が強かったことを正直に告白しておかなくてはならな  
い。

就職試験で不利だったことが、ここでは、こんな小さな子どもが……という同情を買う理  
由になったのかも知れない。たぶんぼくが小学生くらいにしか見えなかったのだろう。

とまどっている

「いつも安定所に並んでるお稚児はん？」

という者がいた。それがタツちゃんだった。

不特定多数の中のひとり覚えていたタツちゃんの記憶力もさることながら、ぼくがよほ  
ど子ども子どもして目立つ存在だったのかとも思う。

「人生くよくよしてたらあきまへんえー」

タツちゃんの口癖を、ぼくはそのときはじめにきいた。安定所にくることがあったら家へ  
遊びにおいでともいった。地下の住人はみんな優しい人だった。

そういうことがあって、ぼくはまた職業安定所に並びはじめたのである。尻のすわらない  
求職者ということで、所員のぼくに対する印象は悪かったが、そのとき、ぼくはけっこう反  
抗的な人間になっていて、そうすることでいくらかみじめさをまぬがれていたようなところ  
があった。

三時ごろになるとタツちゃんたちが銭湯に行くのも前といっしょだったし、労働者とタツ